

長野県神社庁報 第121号

平成27年8月1日発行：長野県神社庁 庁報発行委員会・庁報編集委員会
(長野市箱清水1-6-1 電話026-232-3355 FAX026-233-2720)

特集 終戦七十年を迎えて



写真提供：長野縣護國神社

遊就館のご案内	24
平成27年度長野県神社庁歳入歳出予算書・ 平成27年度災害救助慰精特別会計歳入歳出予算書	20
寄附者顕彰・辞令	19
新任神職の横顔	18
御造宮フォトニュース	17
神宮式年遷宮遷御の儀にお仕えして	16
神道を考える	14
神社のいろは④	12
北マリアナ諸島戦没者慰霊の旅に参加して	11
本庁表彰式	10
東海地区女子神職研修会	10
敬神婦人連合会総会	9
沖縄「信濃の塔」慰霊祭 松塩筑支部	8
戦没者の魂まつり	6、7
ご英霊を祀る社をたずねて	4、5
日誌抄	2、3

日誌抄

（平成二十七年八月）

*教：教化部の略



十六日 新年初会議
二十日 教化部合同会議
二二～二三日 東海五県神社庁事務研修会 於 長野県
二六日 教・教化委員会
二九日 正副庁長会
二九日 別表・特別神社宮司会
三十日 神宮大麻暦頒布委員会

二月

二日 辞令伝達式

三日 教化神政連打ち合わせ 於 飯田市

四～七日 長野県遺族会沖縄「信濃の塔」建立五十周年記念 慰霊戦跡巡拝奉仕 松塩筑支部

五日 中信地区氏子総代研修会 文化庁主催不活動宗教法 人対策会議 於 都道府県会館

五日 宇伯橋淳氏の叙勲受賞を 祝う会 於 ホテル中村屋 庁報編集委員会 教養研修会

九日

九日



二七日 神宮大麻暦頒布修告祭 (湯元ホテル阿智川) 於 長野県 合同会議 東海五県神社庁教化神政連 合同会議

三月

三日 教・祭祀委員会

四日 教・教化委員会

四日 教・調査委員会

四日 神宮大高司御招宴

五日 神宮大麻暦頒布終了奉告祭



十日 神政連長野県本部役員会 美しい日本の憲法をつくる 長野県民の会準備会

十三日 南信地区氏子総代研修会

十七日 東信地区氏子総代研修会

十七日 北信地区氏子総代研修会

十八日 理事会 一九～二十日 東海五県神社庁教化神政連 合同会議

五日 神宮大麻頒布春季推進
会議 於 神宮会館
五～六日 第一回神宮大麻都市頒布
向上計画研修会
於 神宮会館
六日 第八十六回神社庁定例
協議員会



九～十日 第三回神社庁職員実務
研修会 於 本庁
十二日 教・青少年対策推進委員会
神宮大麻頒布常任委員会
十八日 神社庁長懇話会
全国神社庁長懇話会
十九日 神社庁長会
美しい日本の憲法をつく
る国民の会
二十日 「平成二十七年年度総会、全
国代表者実務者会議」
事務担当者会

二十日 「美しい日本の憲法をつくる
長野県民の会 設立総会
二四～二五日 第二十回子供参宮団



四月
二十七日 県内東海五県評議員会
神政連長野真本部長協議員会
六日 教・教化委員会
理事会
七日 辞令伝達式
十四日



五月
十四日 県内東海五県評議員会
教・祭祀委員会
十二日 東海五県神社庁評議員会
於 ホテル志摩スベイン村
十二日 東海五県神社庁連合総会
於 三重県宮サンプリーナ
・サブアリーナ
十四日 庁報編集委員会
十八～十九日 祭式指導者研究会
十九日 全国神社総代会代議員会
本庁表彰式
於 明治記念館
二十日



二一～二三日 神社本庁定例評議員会
二二日 班斂式
二二日 神社庁長会
二六～二七日 教養研修会
於 南信地区

六月
二八日 教・青少年対策推進委員会
二九日 教・調査委員会

三日 神政連本部長事務局長
連絡会 於 神社本庁
三日 神政連結成四五周年記念
式典
四日 於 ホテルニューオータニ
神政連中央委員会
於 神社本庁



四日 神宮大麻頒布常任委員会
支部長懇話会
於 ホテルやまぶき
八～九日 教化部役員会
十一日 近藤政彰宮司 宇治橋淳
富司 階位階降神職身分一級
昇進祝賀会
十五日 於 深志神社 梅風閣

十七～二日 東海地区中堅神職研修会
当番 三重県
十七日 庁報編集委員会
十八～十九日 神社庁事務担当委員会
於 神社本庁
十九日 教化部合同委員会
二二日 第三回神社検定
於 神社庁・四柱神社
二五～二六日 中信地区連絡協議会
於 立山プリンスホテル



当神社は、明治十三年明治天皇の思し召しにより創建され、昭和十三年御遺族を始め県民が参拝しやすい様に、県民の絵意により本県の中央であり、旧陸軍歩兵第五十聯隊に隣接する現在地に仮殿が建設され、明治戊辰の役以来長野県出身の御英霊六万四千五百余柱を御奉斎申し上げております。

境内の樹木は、県内市町村より献木され、その成長された樹木により四季折々の変化をこまやかに映し出し、野鳥の群れ集う「美須々の杜」として参拝者はもちろん、県民の憩いの場として親しまれております。

長野縣護國神社(松本市美須々)

宮司 奥谷一文

ご英霊を
祀る社をたずねて

天皇・皇后両陛下を始め皇族方の御参拝も多く、昭和三十九年五月十三日昭和天皇・香淳皇后両陛下が、又今上陛下に於かれましては、昭和二十六年・四十五年・五十一年の三度に亘り御参拝され、長野県行幸啓の折及び周年には幣帛幣饌料の御下賜を賜っております。

今年、終戦七十年の年を迎え、この七月九日天皇皇后両陛下より幣帛料の御下賜を賜りましたので、十一月六日当神社御鎮座記念祭当日臨時大祭を斎行致し、併せて神社の歴史パネル展・又献灯祭に著名の方々より奉納されました絵画・書など展示を致したく計画しておりますので、県民の皆様方の御参拝をお待ちしております。



信濃招魂社(長野市上松)

宮司 齋藤吉睦

明治十三年四月十三日 創立許可を受け明治戊辰以来の長野県関係の殉職者の英霊を奉祀するため長野市大字本城南の地域に境内の設定をなし社殿の建設を完了し、信濃招魂社と奉称す

昭和十三年十一月五日 新設の長野縣護國神社(現美須々宮)に対し当社より御霊

代を分座し以来同神社の本宮と称す

昭和二十三年十二月三日 長野県より県費供進の指定を受く

昭和十四年三月十五日 内務省令第十二号に依り、同年四月一日信濃護國神社と改称される

昭和十四年五月二十三日 國費神饌幣帛料供進神社に指定される

昭和十六年八月二十七日 神社移転(現在地)土地買収の件、許可

昭和十七年十二月十八日 買収土地の境内設定の件、許可

昭和十七年十二月十九日 神社移転の件、許可

昭和十八年五月二十日 神社移転工事完了、同年八月十一日長野県知事へ報告

昭和二十一年七月十八日 宗教法人令に因り宗教法人の登記を完了、同時に神社名を旧称に復し、信濃招魂社とする

(由諸書より)

上田招魂社(上田市二の丸)

宮司 清住宗廣

御社殿は本殿・幣殿・拝殿と社務所から成り、二千坪程の境内地に鎮座しています。当招魂社は、上田市、小県郡、東御市(旧



北御牧村を除く) 出身の明治戊申の役以来大東亜戦争に殉ぜられた五九三六柱の御英霊を奉斎しています。

当神社の起源は、明治元年戊申の役に従軍された上田藩士三三七三人中戦没者十一名を弔慰する為、明治二年五月十日藩士松平家の二公子忠養と忠直が隊長となり、上田城の西方小泉曲輪練兵場の西北に祭壇を設け、招魂の式典を挙げたことに始まります。



上田招魂社

翌三年三月上田藩知事松平忠礼の名により屋形前広庭(現上田高等学校)の東北隅に本殿・拝殿・御饌殿を建立し殉難者十一名の御霊を鎮祭されました。明治十一年九月上田城三十間堀の東北に御社殿を移築し奉遷、明治十四年三月上田城本丸西北隅に奉遷、対象十二年四月に現在の鎮座地に奉遷されました。

例祭日は、明治元年戊辰の役に出発した当時の四月二十二日となっています。

上伊那郡招魂社

(伊那市大字伊那郡)
宮司 伊藤光宣

明治三七、八年に亘る日露戦後は、近代日本の建設に未曾有の国難にして、之に殉死した者多く上伊那関係で二四九柱に及び靖

國神社に合祀され、護國の英霊として勅祭を受けた。参拝せんと欲すれど当時東都遠く、容易に誠意を社頭に致すことできず私祭招魂社を建設し諸国に習い西南の役以降の御霊を慰めむと明治三十八年上伊那郡神職合議所(現長野県神社庁上伊那支部)は全郡の協賛を得て明治三十九年に工事は竣工、明治四十年公許せられた。



大東亜戦争の殉難将士を合祀し現在五七八九柱を祀り、毎年四月二十三日には上伊那支部の神職が奉仕し、遺族を中心に数百人の参列を得て例祭を肅行している。境内は伊那市街を見渡せる高台に約二、五百坪を有し大方社紋の桜が植えられて伊那公園とも称し花見の名所ともなっている。

松代招魂社

(妻女山招魂社)
(長野市松城町清野)
宮司 瀧澤 基

松代招魂社は、明治戊辰の役における戦死者及び日清、日露の両役に続く満州事変・大東亜戦争により戦歿した松代地区出身の九六九柱の英霊を祭神として、松代藩主真田幸民氏が、明治二年に創建されたのであ

ります。廃藩置県後は県社として長野県知事より祭祀料・修繕費が交付され、また真田伯爵家からも神饌料が支出されて松代町と清野村が他村の委任により隔年交代で祭事を営んで参りました。また忠魂碑慰霊祭は在郷軍人会が共同して執行して参りました。

昭和二十年の終戦以後は公費補助の自治体主催から遺族会を中心として、社会福祉協議会の援助の下、軍恩連盟、傷痍軍人会区長会、婦人会、老連、農協、育成会、海軍会、商工会議所等の組織する招魂社奉賛会によって護持されて来りました。

昭和二十六年には松代町と清野・東条、そして昭和三十年には西条・豊栄・寺尾および西寺尾が合併して新しく松代町が誕生し、昭和五十七年には忠魂碑の再建も行われましたが、戦後七十年、幾星霜を経て、往年の関係者の各位も高齢となり、また多くの方々が他界され、加えて社会認識も多様化して招魂社の維持運営をどうするか模索が続けられている。

(例祭日、九月第一日曜日)



松代招魂社



戦争が終結して今年で七十年となる。

全国で三〇万人といわれる戦没者のうち、海外にある未収集の遺骨は、現在も一〇万人を超えているので、この戦争がいかに壮絶であったか、また、今もって失った家族への悲しみが拭いきれない方々がおられることがうかがえる。戦没者のうち約八〇万人が軍人・軍属以外の民間人であったことも忘れてはならないことであり、戦没者すべてに対しての魂まつりは、平和を誓ってこれからも続けなければならない。

これだけの戦没者をだした戦争の末期と戦後に、戦争で亡くなった方々への思いを込め、その御魂をどのようにまつればよいのかを示したのが柳田國男の『先祖の話』(昭和二十一年四月)と折口信夫の『民族史観における他界観念』(昭和二十七年十月)である。七十年というのは日本の魂まつりの作法では、必ずしも区切り目とされてこなかったが、一つの節目であることは確かだ、この機にあらためて柳田、折口の魂まつりに対する考え方をみておくことにする。

「人心を結束せしむるの要あるべし」

——『先祖の話』の執筆

終戦間近の八月十二日に柳田は、娘婿の宗教学者堀一郎を訪ねた。その時、柳田は堀に「遂に米国に対して降伏と決定せしよしのニュースを携へ来らる。事ここに到りたる上は、問題は、今後の処理と、いかにして学問を今後に役立たしむるかにありと。……さしあたり何よりも人心を結束せしむるの要あるべし」と述べたという(堀一郎『新国学談』のころ、昭和三十八年)。この時の柳田の思いは、多くの人々が死んでいった戦争から日本がどのように立ち直るのかが重要で、落胆、放心している場合ではなく、そのための学問が必要だと、気丈だった。

こうした思いで書き上げられたのが、日本人の信仰の中枢にあると考える、祖霊信仰論を体系化する『先祖の話』である。その体系には、まだ解決されていない理論的問題が含まれているが、この理論の骨子は、家を受け継ぐ子孫が、三十三年、五十年などを経た親たちの御魂の一群を祖霊として

まつる信仰で、祖霊は山上から天上へと昇華し、正月と盆などには家に去来して子孫を見守るという理論である。正月の歳神や稲作神である田の神も、その本質は祖霊であり、先祖の御魂は決して十億億土の彼方に行ってしまうのではなく、子孫との交流を頻繁にもつところに特徴があると説く。

柳田の祖霊信仰論の基盤にあるのは、家の永続であり、累代の親たちは順次「先祖」の仲間入りをしてまつられるということ、戦地で死んだ親の御魂も遠くにいるのではなく、子孫の近くにいう。そして『先祖の話』の最後では、「国のために戦って死んだ若人」の御魂のまつりは、直系の子孫がまつるという考え方を修正し、古くから行われていた叔母から姪へ、伯父から甥へという相続方法、あるいは血のつながりのない者に家名を継がせた習俗にならぬ、その若人を初代にした家の魂祭りを提案している。柳田は「新たに国難に身を捧げた者を初祖とした家が、数多くできるということも、もう一度この固有の生死観を振作せしめる一つの機会であるかも知れぬ」という。

戦争に命を捧げた未婚の若人を初祖とする家の創設は、現実には進まなかったようだが、『先祖の話』で柳田が説いた先祖祭祀のあり方は、戦後の靖國神社の「みたままつり」に取り込まれ、この意味において

は影響力をもったといえる。

「ますらを」の神から未完成霊論へ

—「民族史観における他界観念」

折口信夫は昭和十八年七月に「招魂の御儀を拝して」として、靖國神社の招魂式のことを記している。折口は、この式典に各地から集まった人々と一緒に招魂式を拝して、「野山海川の間から、御魂を招ぎ迎へる、この招魂法を以て、此度迎へられたみたまは、凡三年近い年月を経た御魂が、今や完全に神様におなりになった。現在の信仰では、凡此だけの時を経れば、神となられるものと、信ぜられてゐる訣です」という。「現在の信仰では」と、新たな神の創始法をいうのであるが、こうした祭祀を次のように歌に詠んでいる。

大君は神にしませばますらをのたまをよばひて 神とし給ふ

説明の必要もなかるうが、折口は靖國の



神を、「ますらを」の魂は神としての大君によつて「神」に昇華されたと詠み、さらに「まのあたり 神は過ぎさせ給へども、言どひがたき現身（ウツソミ）われは」と、「神」に対して自分は、限りある「現身」でしかないとも詠っている。

折口は、戦時下には戦死者の魂まつりをこのようにみているのであるが、戦後には、宗教としての神道のありようと教義の再構築をめざしながら、新たな靈魂論と他界論の立ち上げに向かつている。その論文が「民族史観における他界観念」で、ここでは柳田の祖霊信仰論とは大きく異なる論理を提示する。その論理を示す用語が、「完成した靈魂」（完成霊）と「未完成な靈魂」（未完成霊）である。

この論文は、岡野弘彦氏が「戦場における死者、鎮まざる若き未完成霊の問題をもつばら対象にして書かれている」（「折口信夫とその墓碑銘」『國學院雑誌』七九卷一一号）という通り、従来の祖霊と御霊という死者祭祀の理論ではなく、新たな枠組みのなかで戦死者の魂まつりを位置づけようとしたものである。長い難解な論文だが、その要点は、祖霊としての完成霊ではない、若者たちの未完成な靈魂は、古くから鍛錬されることによつて他界に往生する完成霊へと昇華できると考えられてきたという理論である。

「年齢不足の

為に資格の欠けた霊の場合は、ある期間の苦行によつて、贖はれるものと考へた」というのであり、この理論は、自ら何度も通つて実見している南信地域から静岡県西部などに色濃く伝承される新盆の念仏踊り、霜月神楽や三河の花祭りに見られる若者たちの舞（三つ舞や四つ舞など）の、修練ともいふことができる全身を躍動させる舞の姿を基にしている。若者たちはこうした修練を重ねることで人間界では「おとな」となり、他界では「老人」になると考えたと言っている。そして、この理論は、柳田が説く家累代の親と子のつながりの中での魂まつりではなく、地域社会全体としての魂まつりとして提示されているのである。

柳田と折口が戦中・戦後に説いた戦死者の魂まつり理論は、このように大きく異なっているが、戦死者の魂まつりのあり方を考えることは、より強く戦争のない平和な世界を求めることでもあり、その議論は続けなければならない。



みたまやすらかに

―沖繩「信濃の塔」慰霊巡拝―

神社庁松塩筑支部 遠藤綾子

財団法人長野県遺族会主催による沖繩「信濃の塔」慰霊巡拝が、去る二月四日から七日にかけて行われました。今回の慰霊

祭は「信濃の塔」建立五十周年記念という事もあり、当番支部である我が松塩筑支部では、遺族会より御依頼いただいた、昭和十三年香淳皇后が御英霊に対して詠まれた御歌の舞「みたま慰の舞」も合わせて奉奏すべく、六名で御奉仕に向いました。初日は、県内各地より集った慰霊巡拝団、約五十名と共に羽田空港より発ち那覇空港に到着しました。出発前の話では、沖繩は二月でも春の様な気候だと聞いていたので楽しみにしていたものの、この日の天気は曇り。それほど温度は高くなかった様に思います。とは言え、長野県の二月の寒さとは比べものにならないほど過ごし易く、気持ちの良い風が通り抜けていました。早速一行はバスに乗り換え「沖繩縣護國神社」にて正式参拝をしました。ここでは、女性の神職が流暢に御説明下さり、帰り際にはバスにまで足を運ばれ手を振っての見送り、その姿に同じ女性として親しみを感じると共に教えて頂いた事が沢山ありました。その後ホ

テルでの結団式では、慰霊巡拝団の方々と沖繩料理で会食をしました。

二日目、いよいよ慰霊祭当日。神職一同は準備、交通渋滞を考慮して、参拝団より一足早くホテルを出発、四十分ほどかけて国立沖繩戦歿者墓苑の広大な敷地の中を通り「信濃の塔」に到着しました。苑内は清掃が隅々まで行き届き、凜とした空気と時折強い風が吹いていました。心配されていた雨にも降られる事なく、私たちの念願であった「みたま慰の舞」の奉奏を含め、無事に齎行する事が出来ました。その後巡拝団と合流し、県立第一高等女学校と沖繩師範学校女子部の生徒・教師の慰霊碑「ひめゆりの塔」、沖繩最大の戦跡、沖繩戦跡国定公園にある「沖繩県平和祈念資料館」を見学しました。ここではそれぞれに当時の人々の想い、激戦の中での暮らしなど忠実に綴られていました。続いて、戦時中において命の尊さを説き、最期まで学徒隊を守り抜いた、佐久市出身の軍医、小池勇助隊長が自決された「糸洲の壕」を見学しました。ここではかつての積徳高等女学校の生徒だった方がお迎え下さり、全員で真つ暗な

壕へ歩みを進め、この場所では食事の仕度をし、又ここには傷を負った人々が大量横たわっていたなど細かに御説明いただき意義深い一日となりました。

三日目は、世界最大級の水槽で巨大なジンベエザメやマンタが群れ泳ぐ「美ら海水族館」、道の駅の屋上展望台から「嘉手納基地」を展望、車窓より「普天間基地」を眺め、その一部を取り戻し金網一枚の境で建設された「佐嘉眞美術館」、昭和十九年日本海軍設営隊（山根部隊）により掘られた「海軍司令部壕」を巡りました。

最終日の四日目は、平成四年見事に復元を果たした「首里城」を見学し、帰路につき全員無事に長野へ帰る事が出来ました。

この旅を通して、多くの事を学び、考え、想った四日間でした。平和な時代を残す為に日本人としての生き方を示し遺された先人達に感謝と敬意を申し上げ、御霊の安らかならんことを祈念しつつ御報告と致します。



次世代へ語り継ぐ

―木曾支部 敬神婦人会―

会長 本南久美

平成二十六年、長野県敬神婦人連合会『総会』が、昨年十一月二十六日、一三六名の参加の元、木曾の地上松町に於いて開催され、記念講演では水無神社名譽宮司宮田正士先生による講話を拝聴する機会に恵まれました。

私たちがこのような暮らしをさせて頂けるのも、御国の為・御家族の為に懸命に尽くされた方々のおかげだという事を改めて考えさせられました。中でも戦争末期の『神風特別攻撃隊』の話では、多くの若者が飛行機・潜水艇など、爆弾や爆薬と共に出撃されたそうです。宮田先生自身は出撃することは無かったようですが、いつ出撃の命令が下されるのか分からない中、様々な訓練を強いられ又、多くの戦友たちが命を失い、耐えがたい体験をなされたそうです。これまで見た事な



瀧澤けい子会長あいさつ

いスライド(写真)や本人の体験等を懇切丁寧に説明して頂き感動致しました。

お互いに多くの犠牲者をもたらす戦争は、決して許される行為では有りませんが、御国の為・御家族の為に尊い御命を捧げられた方々の上に今の世が有る事を、七十年の時を経て決して忘れてはならないことと思えます。

今年二月、終戦七十周年を迎える年、木曾支部主催の『東国三社参りと靖國神社正式参拝の旅』に参加させて頂き、『昇殿参拝』と『遊就館』の見学では、宮田先生の御講演を思い出し、いつもとは違う思いで参拝をさせて頂きました。

二度とこのような悲劇を繰り返さないことはいままでも無く、新たに次世代に向け、私たちの立場からどのように伝承して行かなければならないか、本年度戦争について改めて考えさせられた事を感謝申し上げます。



講師 宮田正士先生の若かりし頃

象山先生に学ぶ

―東海地区女子神職会研修会を終えて―

長野県女子神職会 副会長 立澤寿江

梅の蕾もまだ固く春まだ浅き平成二十七年三月五日、東海地区女子神職研修会を象山神社に於いて開催致しました。二十二回を迎える今年の研修会は長野県が当番となり、初めて北信地区での開催となりました。

天気予報では雪の心配もあり先ず当日は寒いながら晴天に恵まれました。

研修は、終戦七十年にあたりますが、象山地下壕(松代大本営)の見学研修を行いました。ヘルメットを被りボランテアの方々の説明を受けながら平和への思いを強く致しました。

その後象山神社正式参拝、昼食には松代名物の長芋の入ったお弁当を頂き、午後から象山神社瀧澤基宮司より「幕末の先覚者 佐久間象山から学ぶ事」象山神社の御祭神でもある佐久間象山先生の人物、ご功績等のご講義を頂きました。

講義の始めに、天皇陛下の



瀧澤宮司の講演

パラオご訪問
に關連してベ
リリユー島で
の日本軍の勇
姿をお話し下
さいました。
六十四名女子
に見つめられ
瀧澤宮司も緊
張されるので
はと心配致し
ましたが、巧
みな話術で瞬く間に女子の心を掴み、和や
かに講義が進み、象山先生のご功績に、長
野県人として鼻高々な気分になりました。
また、神社界の今後の見通し、課題等問題
の深刻さを指摘頂き、有意義な時間を過ご
しました。

講演終了と共にお茶の時間となり、松代
の銘菓を頂き、無事に閉会となりました。

東海地区女子神職研修会においては、手
作りの記念品を出すという習わしがあり、
他県に行つて記念品を頂く時はとても嬉し
いのですが、いざ自分達が…となると、頭
を悩ませるところでした。しかしながら、
そこは女子の世界、手先は器用なはずで
すし、手芸に長けた方もいますし、装束店か
らの御協力も頂き、低予算内で素敵な「額
当入れ」を作成する事ができました。手前



ヘルメットを被り地下壕へ



記念品の「額当入れ」

味噌ではありませんが、参加して下さった
方には喜んで頂けたと思っております。

日頃なかなか集まらない女子神職会では
ありますが、沢山の会員が参加して下さい、
当日は何から何まで会員が分担し、スムー
ズに進行でき、本当に嬉しく有難い事では
た。

また、宮司様をはじめ職員の方々には、
計画当初から多大なご協力を頂き心より感
謝申し上げます。

皆様のお力を頂き当番県として無事に研
修会を終え、会員一同ほっとして笑顔でお
宮を後に致しました。

神社本庁表彰式 功労者を顕彰

神社本庁表彰式が五月二十日、池田厚子
神社本庁総裁が御臨席のもと、東京の明治
記念館で行われた。

奉仕神社の施設経営に尽力した功労者、
敬神の念が厚く多年神社の経営に協力した
功労者として神職・役員・総代等二百六十
名が晴れの栄に浴した。

本県では次の四名が栄誉を受けた。

平成二十六年功績表彰

表彰規程第三条第二号 表彰状

住吉神社禰宜 渡邊 惣七

健御名方富命彦神別神社宮司 高橋 勲

大田神社宮司 太田 秀系

表彰規程第三条第三号 表彰状

諏訪大社大総代 長田 正康



北マリアナ諸島戦歿者慰霊の旅に参加して

木曾支部 伊奈川神社 永代総代 山本克之

私の父は先の大戦で、第四次ニューギニア戦に参加し、ニューギニア島のバロンという地で最期を遂げた。

海外へは何度も渡航している中で、いつかはニューギニア島を訪れたいと思いつつもその機会が無く、今の歳を迎えている。

昨年、庁報「志なの」夏号を読んでいると、そこに「北マリアナ諸島戦歿者慰霊祭」の記事があった。県内で慰霊の旅を行っている団体があるのか…そこには我が木曾支部事務局である神田氏の名前が、しかも会長となっているではないか。早速神田氏に電話をして詳細を聞いた。

これまで慰霊の旅というものには参加する機会が無く、況してやニューギニア島は遠く諦めかけていたところで出逢った機会、父が命を賭した地ではなくとも慰霊の誠には必ず通ずるものがあると、今年の初め、木曾支部で靖國神社を参拝した際に正式にテニアン島での戦歿者慰霊祭に参加することを決めると、事務局より次々と葉など事前通知が届くにつれ、日本にいる内から自ずと慰霊の気持ちが高まった。

五月十七日、神田会長と木曾を出発し成

田に前泊、子供から七十四歳の私まで老若男女、参加する仲間と一献、すぐに打ち解けあうことができた。翌朝、成田空港より出国、三時間余りでサイパン空港に到着。セスナ機でテニアン島へ渡りホテルに入ると、テニアン市長夫妻を囲んでの夕食会が催され、現地ならではの趣きに感激した。

十九日朝、神職の皆様は白衣に、参列する我々も身を整え、スーサイドクリフの慰霊祭場へ移動、台風七号が通り過ぎた直後ということで大変蒸し暑く、更に照りはたたく太陽の日が肌を突き刺した。全員で準備し、慰霊祭が始まると辺りは何ともいえない緊張感に包まれ、祭詞・碑文朗読に続き今年を終戦七十年ということで浦安の舞の奉納があったが、これが機に巫女さ

機に巫女さ



浦安の舞

んが参加される年は是非とも舞を奉納していただきたいと思っただけだ。舞に続いて国歌斉唱・海ゆかば奉唱の間は知らずの内に涙が溢れ、平和な今の世の礎となった尊い御命、尊い御霊に改めて感謝申し上げた。



サイパン島 慰霊巡拝ツアー

慰霊祭後には、テニアン島内の戦跡を案内いただき、サイパン島に戻った次の日はサイパン島内の戦跡を巡った。慰霊巡拝ツアーに参加し、ジャングルの中の野戦病院跡や弾薬庫跡などを巡る厳しいツアーと聞いていたが、「隊長！」と慕ってくれ共に参加した皆さんと歩き回り、楽しく意義深い一日となった。

帰国後は靖國神社に参拝し無事に帰ってきたが、このように素晴らしい事業を、十四年の長きに亘り続けられていることに敬意を表すると共に、来年も都合が着いたら是非参加したいと思っ

神社のいろは④ 修祓について

教化部祭祀委員会 武居 香一

今回は修祓の起源・作法について説明致します。

八束清貴著「神社有職故実」より

◆修祓
祓を行うこと。修祓は祭祀執行に当たり、

一層の清浄を期するために神饌、玉串、奉仕者、参列者などの罪穢を祓い除く行事である。よってあらゆる祭典の直前に修祓が行われる。修祓は、祓主による祓詞の読誦、大麻・塩湯による祓えによって構成されている。その起源については、祓詞の内容にもあるようにイザナギが黄泉国より帰り、築紫の日向の橘の小門の阿波岐原にて、禊ぎ祓えを行った故事による。身につけていたものを投棄することによる祓と海水に身をひたす禊とを行ったとするものである。祓の具として、大麻と塩湯が用いられるのは



この故である。参籠、別火、禊、手水、などもその例であるが、祓の具として切幣、人形、散米、小麻などが用いられ、現に様々な場面でこれらを用いて祓が行われている。

参考資料 弘文堂「神道辞典」

◆修祓を受ける作法
神職が祓詞を奏上している間上体を六十度傾けます。



① (写真①)

両手の指先は膝頭につくようにします。



② (写真②)



両手の位置は太腿の中程にします。

(写真④)



大麻や塩湯の御被いを受けます。上体を四十五度傾けます。

(写真③)

④

③



◆塩湯
塩をお湯で溶かしたもので榊等の小枝を浸して御被いをします。

(写真⑦)

⑦



◆大麻
榊の木に麻と紙垂をつけたもの(写真⑤)、又は白木の棒に麻と紙垂をつけたもの(写真⑥)があります。

⑤



⑥

◆祓戸神

「はらえどがみ」ともいう。祓戸(祓所・祓殿)とは祓を行う場所のことで、そこで行われる祓をつかさどるのが祓戸神である。祓戸は神祇令大祓条や「延喜式」にもみえ、古代より公的な祓の儀式のなかに位置づけられていた場所で、平安時代以降も祓いの行われる場として古記録などに記載されている。祓戸神は『延喜式』の六月晦大祓の祝詞に記されている神々のことと瀬織津比咩、速開都比咩、氣吹戸主、速佐須良比咩の四神をいう。これらは中国の罪・穢を祓い去る神々であるが、四神の名が記紀にはみえないため、それぞれを記紀のどの神とするかについては諸説がある。イザナギが安波岐原で祓を行ったときに生じた神にあてる説が多く、本居宣長は、瀬織津比咩を八十湊津日神、速開都比咩を伊豆能売神、氣吹戸主を神直毘神に当てている。また速佐須良比咩を風木津別之忍男神に当てる説や住吉三神(上筒男神・中筒男神・底筒男神)を祓戸神に加えるという説もある。

※注 記紀一きき。古事記、日本書紀の略。中国一なかつくに。私達が生活している世界。

弘文堂『神道辞典』より

お盆は神道行事

教化講師 山崎 洋文

今年の四月と五月は、長野県神社庁界限は善光寺の御開帳でごつたがえしておりました。門前のスクランブル交差点は渋谷の駅なみに混雑しておりましたが、人々の構成年齢はかなり年が重なって後期高齢者の人々の姿が目立ちました。

参拝者の目的はなんでしよう。それは回向柱に触れることです。二時間待ち・三時間待ちをしても回向柱に触れる順番を待ちます。確認のために記しますが、御開帳といっても秘仏の阿弥陀様が公開されるわけではなく、模造の前立ち本尊の逗子の扉が開かれその指と回向柱が紐でつながり回向柱に触れることは前立ち本尊に触れること



となり、そのご利益は計り知れないといえます。

ご利益とはなんでしよう。阿弥陀様と繋がるということは、来世つまり死んだら極楽浄土に行けるという意味なのです。

「身はここに心は信濃の善光寺 導き給へ弥陀の浄土へ」来世の約束をはたして現世で安心して生活を送るのです。

お盆の序章として、多くの人が信じている善光寺信仰、阿弥陀信仰をまとめてみると、死ぬことに不安をもった人々が死後の安寧を祈り、死後の安心を得るために回向柱に触れるのです。納棺の時に死者の懐に入れる血脈も死後の安全を約束する切符なのです。

さて、日本古来の死者の魂に対する信仰は、死者の魂は生きている我々のすぐそばにいて、我々を見守っているという考えかたであります。先祖の魂は近くの山にいくという考え方でもあります。そして、冬と夏の満月の日に家族の所に帰って来るといふ信仰に 繋がります。冬が正月で、夏がお盆というわけです。

松迎えや盆花取りにやまに入るのは重要な行事で、実際に先祖の霊を山に迎えに行く行事なのです。大切な行事です。小さいころからそうのようにしていた私にとって特に大事なことだと信じています。霊が近くの山にいる。という考えかたと、西方十万億土という考えることもできない壮絶な遠さの場所に往くというのでは、かなりの違いがありますが、そこが日本人得意の習合の理論で、浄土を山のなかに見出した、海の彼方にみいだしたり、より近いものとして把握しているようです。回向柱に触れるひとたちも自分が死んだら十万仏土西に行きたいとは考えていないでしょう。

お盆という言葉は辞書で引くと「ウラバンナ」というサンスクリットで盂蘭盆会となったとあります。地獄で逆さ釣りの刑になっていたひとを助ける法要とあります。が、なにかおかしいとおもいませんか。一方、仏様という言葉は、正式にいうとお釈迦様のことで、ゴータマ・シッダルダという歴史上の人物が悟りをひらき仏になります。ところが、日本人は、一般に死んだ人死体をホトケといえます。死んだ人が即悟りを開くわけでもなく、なぜ死人をホトケと呼ぶのか、以前から不思議に思っていました。

鞍馬天狗などの時代劇の作者に大佛次郎というペンネームの作者がいます。なんて

読むのかご存知ですか。「おさくらぎじろう」と読みます。大仏を「おさくらぎ」と読むわけで、仏・佛とは、死人にあげるお皿のことをよぶそうなのです。盆の精霊に、ごはんを捧げるのには柿の葉に盛り付けます。そして、精霊を「柿の葉様」とよびます。死人にあげるお皿を佛と呼ぶならば、死人を仏様と呼ぶわけです。さらに、夏に帰る御霊たちに供えるものをお盆（現在の盆は、皿なども、盆とよんだ）にお供えし、その御霊をお盆様と呼ぶとしたら、祖先の御霊の別称をお盆と呼ぶことになるのです。

お盆にはお寺さんが檀家を一軒一軒回って、棚業するのが常ですので、お盆というのは仏教行事だと思っている人が多くいます。しかし、山にいつて盆花をとり、山からご祖先様の霊を迎えてきたり、十三日の迎え火は、お墓にいつて灯したり、自宅の玄関前で炊いたり、精霊迎えの様子は、仏教というよりは神道民俗の霊魂観の基づく行事であるような気がします。

中元という中国から伝わった雑節があります。いまでは、夏のご挨拶の贈り物のことをいいますが、実際は暦の雑節で、上元は旧正月十五日、下元は旧十月十五日。中元は旧七月十五日で、この中元の満月の日に半年無事の祝いと先祖の亡霊の供養をしました。これが盆と重なって祖先の祭りを

中元祭ともいいます。お盆の祭りが先祖の霊と一緒に楽しむのが盆踊であり、各地に有名な盆踊が残っています。これも仏教行事というより古来からの祖先信仰の名残のように思います。

御開帳の間、神社庁の隣の信濃美術館では、県内の仏像等を集めて、「いのりのかたち」という特別展をおこなっていました。なんといつても目玉は、縄文のビーナスと仮面の女神の国宝である本物二体でありました。縄文のテラコッタたちは、仏教という概念のない古代においても、祈りの対象物であるということをも、肌で感じました。見れば見るほどひきつけられるものがあり、自然と祈りの心になりました。私の村、筑北村からも、三体の仏像が展示されました。その中の、鎌倉時代の鉄物は私の家の裏山のお堂にあつたもので、昔から慣れ親しんだ仏像でありました。展示された仏像を見ているうちに、突如気がついたことがありまし



た。縄文のビーナスも、裏山の鉄仏も、その他の、仏像たちも、同じ祈りの対象だという至極簡単なことです。

日本人の多くが自分を仏教徒だと思っています。それは、檀家制度、墓制度、葬送儀礼の方式が仏教であり、亡くなれば善光寺にいつて血脈をもらつて極楽へ行こう。という霊魂観が御開帳を盛んにしています。極楽往生した肉親の霊魂が遺された家族を見守ってくれるという浄土信仰は、もともと古代からの日本の思想の山が極楽になったものではないでしょうか。

お盆の度に考えることは、ご祖先様の祭りは、仏式も神式もなく私たちに古代からの繋がり、先祖から子孫にかけての縦の繋がりを確認させる大切な行事であるということです。

（参考文献）

- 信州仏像順礼 武笠朗監修 信濃毎日新聞
- 善光寺さん 小林計一郎 銀河書房
- こよみ事典 岡田芳朗他 柏書房
- 先祖の話 柳田国男 ちくま書房



神宮式年遷宮遷御の儀にお仕えして

上伊那支部 唐 沢 光 忠



この度第六十二回神宮式年遷宮諸祭の中で一番最後を締め括る、豊受大神宮別宮風宮の遷御の儀にご奉仕

させていただきました、大変尊い機会をいただきました。三日間の短い期間ではありましたが、貴重な体験をさせていただきましたので、その内容について少し触れたいと思います。

三月十四日、外宮齋館到着後、先ず応接室にて「第六十二回神宮式年遷宮宮掌補」として辞令を受けました。現地にて習礼、齋館に戻り明日の遷御の儀に奉仕する服装（衣冠に明衣を懸け手袋を懐中）を著装し、川原大祓を行いました。当日祭儀に使用する仮御樋代木仮御船代御装束神宝の入る各唐櫃及び、奉仕者全員を被い参進、本殿及び新殿の御床下にそれぞれの御物を安じ、諸員著版（着座）の後八度拝を行い退下、一日目は終了となりました。

二日目夜、太鼓の報せに合わせて著装等準備を進め、午後七時十分、大宮司・少宮司・

禰宜四員・権禰宜十一員・宮掌宮掌補十八員他供奉諸員参進。雨天の為、傘を差しつつ淨閣の中を風宮本殿の前へ進み著版します。大宮司祝詞奏上、開扉の後、愈々出御。召立文が読み上げられ、宮掌宮掌補は各執物を捧持しに進みます。私の務めは執物の内の四番目、『御胡録（おんやなくい）』という御神宝を捧持する役でした。宮掌による鶏鳴三声、大宮司による出御三声により御遷りが始まります。総ての御遷しが終わり、開扉、大宮司の祝詞が奏上され、諸員八度拝を行い退下、遷御の儀が無事修められました。翌日、新宮での最初の奉幣の儀を見届け、帰路につきました。

参籠中、神宮神職の多くの方より、「このご奉仕で何かを感じて持ち帰って欲しい」という意の言葉をいただきました。その他神事についてもお話する中で、「大変なお祭りをご奉仕なさっているのですね」と発した私に『そんなことないですよ』とすぐ返答が。続けて、『傍から見れば変わっているとかわれるかも知れないが、ここの神職はそれが好きで、興味を持って、本気でやっ

ている。だからあまり大変とは思ったことないですよ」と。更には、神宮でご奉仕する上で一番重要なのは自身の健康、体調管理で、体が思う様に動かなければ、このハードな神事にご奉仕が出来ないから、とも仰っていました。

当たり前のことですが、忙しさの中で後回しになったり、ともすれば忘れてしまったりすることであるかも知れません。神職という職人、又、全ての職業にも通ずる大切なプロ意識だと感じました。神様にお仕えする事に徹底して気持ちを決める。私たちがお手本にすべき姿が神宮にはありました。

結びに、
此度のご縁をいただいた神社庁関係者、お世話になりました。話になりました。皆様に改めて御礼を申し上げます。ありがとうございます。ありがとうございました。



御造営 フォトニュース

○梅戸神社（上伊那郡飯島町飯島鎮座）

宮司 今井 泰

本殿覆屋・拝殿・末社・神饌所改築
造営費 八阡萬円

改築建物は改修を重ねて来ましたが、雨漏りや垂木の腐り等傷みが激しく改築が必要となりました。耐震化工事、内拝殿の拡幅祝詞殿の新設、参列者の生活様式の変化による胡床使用の強い要望などにも対応し、費用は篤志者や氏子の奉賛金等によりました。昨年七月二十日に地鎮祭を斎行し、本年三月二十日に竣工しました。四月二十八日に遷座祭、二十九日には祈年祭に併せて竣工奉祝祭を斎行しました。氏子、また関係各位のご協力に深謝致します。



○治田神社（千曲市稻荷山鎮座）

宮司 宮川良雄

手水舎再建
再建費 九百萬円

明治九年に建て

られた手水舎は百三十七年が経ち老朽化著しく、地震等による倒壊の懸念があり、改築が長年の懸案でありました。建設委員会を組織し、氏子の皆様の御協力のもと、昨年九月初旬着工、十二月十日竣工、十二月二十日には竣工奉告祭が盛大に斎行されました。氏子の皆様及び関係各位の御協力御尽力に深く感謝申し上げます。



○諏訪神社（長野市鬼無里財又鎮座）

宮司 宮川和浩

鳥居再建
再建費 参百萬円

大正二年に建てられた鳥居は百年あまりの歳月を経て傷みが激しく、昨年秋季に倒壊の恐れが出てまいりました。直ちに建設委員会を組織し、氏子の皆様の御協力によって木造両部鳥居を再建いたしました。地元出身の材木店が施工にあたり、これまで通りの鳥居を忠実に再現してい



たできました。五月五日には竣工報告祭が例大祭と併せて盛大に斎行されました。次世代へ受け継ぐ鳥居の再建にあたり御尽力御協力いただきました方々に、深く感謝を申し上げます。

○吉村神社（飯山市大字吉字若久保鎮座）

宮司 大澤奉紀

本殿覆殿兼祝詞殿、拝殿 改築
造営費 吉阡参百萬円

応永年間の創祀と伝えられる本神社は、氏子数二十五戸の氏神として鎮座する。経年による破損著しく改築は長年の念願であった。平成二十五年秋、漸く機運醸成し、翌年三月に仮殿遷座祭、四月に地鎮祭、十月四日に本殿遷座祭、同月十九日には例祭に併せ奉祝祭が盛大に斎行された。（写真）
新社殿は、雪害対策として基礎を高くし、床下には収納庫を設けるなど工夫をこらした。

地域氏子の皆様の厚い崇敬心に敬意を表すと共に関係各位に心より感謝申し上げます。



新しく任命された神職を紹介します



内藤 菜里 二十二歳
大屋神社 権禰宜
上小支部

今春、國學院大學にて神職課程を履修し四年間の集大成を迎えた。神職に任命されて感じたことは今求められている社会的使命を果たすことだと考えた。日本文化の根幹として長い歴史を有する神道を体系的に学び、あわせて内外の宗教と宗教文化に対する知識を幅広く学修して宗教の意義・役割等に精通し、国際化・情報化された現代社会に即応しつつ、平和で健全な社会・国家の形成に寄与し得る人になることを現時点で目標としている。日本古来から現在にまで守り続けてきた祖先の方々の歴史を正しく後世へと繋げていきたい。



宮田 伊織 二十二歳
水無神社 権宜
木曾支部

この度、正式に神職に任命していただいたことにより、心を新に神務に励むことができていることを非常に嬉しく思います。私は今年の春に大学を卒業したばかりの未熟者でございますので皆様方のご指導とご鞭撻をいただきますよう、よろしくお願い申し

上げます。

これからは、神職として祭祀を厳粛に執り行うことはもちろん、地域の町おこしにも積極的に貢献していきたいと考えております。



大野 龍一郎 三十一歳
四柱神社 権禰宜
松塩筑支部

この度、平成二十七年三月十五日付を以て四柱神社権禰宜を拝命致しました。杜家ではない私が神社界との有難いご縁を頂き、長野県神社庁神職の末席に加えて頂き、身が引き締まる思いであります。

これより後は、私自身が神職としての正しい見識を身につけ、日本の美しい伝統文化である神道の精神を後世に伝えるべく、日々精進し研鑽に励んでいく所存でございます。まだまだ至らない点が多い若輩者ではございますが、今後とも皆様方のご指導ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。



入枝 潤 二十四歳
長野縣護國神社 権禰宜
松塩筑地区支部

神職となるにあたりましては、日々感謝の気持ちを持たず、御英霊に御奉仕致しますと共に日々精進して参ります。未熟者では御座いますが、皆様のお役にも立てるよう努力して参りたいと思っておりますので、今後とも、

御指導御鞭撻の程、宜しくお願い致します。



竹田 匠汰 二十一歳
長野縣護國神社 権禰宜
松塩筑支部

平成二十六年に御縁があり長野縣護國神社へ奉職させて頂き、この度権禰宜を任命され改めて神職としての責任の重さを痛感しております。

まだまだ未熟者ではありますが、皆様のお力をお借りしながら、誠心誠意日々の御奉仕に励んで参りたく存じます。これからも御指導御鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。



金子 知只 四十八歳
沙田神社 権禰宜
松塩筑支部

この度、神職として松本市島立に御鎮座致します沙田神社の権禰宜を拝命いたしました。

私は幼少の頃から、他界した父の神職姿を見て育ちました。日々父の姿を見ているうちに、神職に憧れを持ち神職の道へ進みました。未熟者ではありますが、皆様方のお役に立つよう努力して参りますので、御指導御鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。

寄附者顕彰(平成26年11月)

各神社からの申請により、左記金品の寄附者に対し感謝状が授与されました。赤誠の真心を奉納いただいた皆様に改めて感謝の意を表します。(支部名・神社名・鎮座地・授与の理由・氏名)敬称略

神社本庁統括感謝状 参百万円以上寄附

〔上伊那支部〕

梅戸神社(飯島町)

神社改築に多額の浄財

羽生 文昭

長野県神社庁長感謝状 参拾万円以上寄附

〔上小支部〕

横尾神社(真田町)

末社改築に多額の浄財

北澤甲子治

〔上伊那支部〕

梅戸神社(飯島町)

神社改築に多額の浄財

上沼 文男

全

全

上沼美恵子
圓山 武

〔松塩筑支部〕

正八幡宮(安曇野市)

多額の浄財

丸山 憲治

〔更埴支部〕

自在神社(坂城町)

鳥居改修に多額の浄財

株式会社 竹内製作所



神社名	本兼職務	氏名	月日	支部名
昇級・神職身分一級				
七久里神社	宮司	近藤 政彰	三・一	飯伊
小野神社	宮司	宇治橋 淳	三・一	松塩筑
大宮諏訪神社	兼 宮司	市原 日貴	一・一	飯伊
天満天神社	〃	〃	〃	〃
鳥山稻荷神社	〃	〃	〃	〃
琴平社	〃	〃	〃	〃
愛宕稻荷神社	〃	〃	〃	〃
長姫神社	〃	〃	〃	〃
西羽神社	兼 宮司	井出 行則	一・一	北佐久
勝手神社	〃	〃	〃	〃
堀名田神社	〃	〃	〃	〃
飯綱神社	兼 宮司	湯本 正通	三・一	上高井
矢作社武田八幡社合殿	〃	〃	〃	〃
高井八守神社	兼 宮司	〃	〃	〃
筑紫神社	兼 宮司	林 剛邦	三・一五	松塩筑
専達三嶋神社	兼 宮司	湯本 正通	六・一	上高井
東山神社	〃	〃	〃	〃
赤野田神社	〃	〃	〃	〃

神社名	本兼職務	氏名	月日	支部名
本務替				
小山八幡宮(禰高神社より)	權禰宜	高山 恩典	二・二一	上水内
栗駒神社(京舞神社より)	權禰宜	島山 智	三・二六	更級
大宮諏訪神社	兼 宮司	市原貴美雄	二・三二	飯伊
天満天神社	〃	〃	〃	〃
鳥山稻荷神社	〃	〃	〃	〃
琴平社	〃	〃	〃	〃
愛宕稻荷神社	〃	〃	〃	〃
長姫神社	〃	〃	〃	〃
禰高神社	權禰宜	高山 恩典	一・三一	南安曇
矢作武田八幡社合殿	兼 宮司	山本 毅	一・三一	諏訪
飯綱神社	兼 宮司	湯本 篤	二・二八	上高井
高井八守神社	〃	〃	〃	〃
専達三嶋神社	〃	〃	五・三一	〃
東山神社	〃	〃	〃	〃
赤野田神社	〃	〃	〃	〃

神社名	本兼職務	氏名	月日	支部名
新任				
四柱神社	權禰宜	大野龍一郎	三・一五	松塩筑
長野縣護國神社	權禰宜	入枝 潤	四・一	〃
長野縣護國神社	權禰宜	竹田 匠次	四・一	〃
大屋神社	權禰宜	内堀 菜里	五・一五	上小
水無神社	權禰宜	宮田 伊織	六・一五	木曾
沙田神社	權禰宜	金子 知只	六・一五	松塩筑

神社名	本兼職務	氏名	月日	支部名
退職				
諏訪大社	權禰宜	日比野元紀	三・三一	諏訪
燭幽 讀んで御霊の安らかなることをお祈りいたします				
職氏名	階位・身分	氏名	燭幽日	支部名
西羽神社(宮司代務者)	權正・三	小林 邦彦	二六七・三十	北佐久
鹽竈神社(權禰宜)	正・三	星 貴史	二六・二三	松塩筑
豊岡神社(兼宮司)	正・二上	富岡 壽	三・一九	上水内
鳥居宮(兼宮司)	正・二上	原 万平	四・三十	長野
禰高神社(兼宮司)	浄・一	穂高 守	六・一九	南安曇

神社名	本兼職務	氏名	月日	支部名
大宮諏訪神社	兼 宮司	市原 日貴	一・一	飯伊
天満天神社	〃	〃	〃	〃
鳥山稻荷神社	〃	〃	〃	〃
琴平社	〃	〃	〃	〃
愛宕稻荷神社	〃	〃	〃	〃
長姫神社	〃	〃	〃	〃
西羽神社	兼 宮司	井出 行則	一・一	北佐久
勝手神社	〃	〃	〃	〃
堀名田神社	〃	〃	〃	〃
飯綱神社	兼 宮司	湯本 正通	三・一	上高井
矢作社武田八幡社合殿	〃	〃	〃	〃
高井八守神社	兼 宮司	〃	〃	〃
筑紫神社	兼 宮司	林 剛邦	三・一五	松塩筑
専達三嶋神社	兼 宮司	湯本 正通	六・一	上高井
東山神社	〃	〃	〃	〃
赤野田神社	〃	〃	〃	〃

神社名	本兼職務	氏名	月日	支部名
大宮諏訪神社	兼 宮司	市原貴美雄	二・三二	飯伊
天満天神社	〃	〃	〃	〃
鳥山稻荷神社	〃	〃	〃	〃
琴平社	〃	〃	〃	〃
愛宕稻荷神社	〃	〃	〃	〃
長姫神社	〃	〃	〃	〃
禰高神社	權禰宜	高山 恩典	一・三一	南安曇
矢作武田八幡社合殿	兼 宮司	山本 毅	一・三一	諏訪
飯綱神社	兼 宮司	湯本 篤	二・二八	上高井
高井八守神社	〃	〃	〃	〃
専達三嶋神社	〃	〃	五・三一	〃
東山神社	〃	〃	〃	〃
赤野田神社	〃	〃	〃	〃

平成27年度長野県神社庁歳入歳出予算書

歳入の部

(単位：円)

款	科 目	予算額	前年度予算額	比較増減△	附記説明
1	幣 帛 幣 饌 料	750,000	750,000	0	神社本庁より
2	交 付 金	101,158,000	102,358,000	△1,200,000	本庁交付金
3	負 担 金	32,125,000	32,105,000	20,000	支部負担金、神社負担金、神職負担金、特別寄贈金
4	協 賛 金	6,160,000	6,170,000	△10,000	特別協賛金、寄付金
5	財 産 収 入	50,000	50,000	0	財産利子配当金
6	補 助 金	120,000	120,000	0	神社本庁より参事給与補助金
7	各 種 証 明 料	2,920,000	2,920,000	0	神職任命・登録料、承認料、各種手数料・証明料、階位授与交付金
8	諸 収 入	2,500,000	2,500,000	0	賽物収入、雑収入
9	管 理 費 収 入	450,000	550,000	△100,000	庁舎管理費収入、関係団体管理費収入
10	過 年 度 収 入	200,000	200,000	0	
11	繰 越 金	17,567,000	18,937,000	△1,370,000	
	合 計	164,000,000	166,660,000	△2,660,000	

歳出の部

(単位：円)

款	費 目	予算額	前年度予算額	比較増減△	附記説明
1	神宮神徳宣揚費交付金	47,861,387	48,447,033	△585,646	支部を通じて各神社へ
2	幣 帛 幣 饌 料	8,250,000	8,250,000	0	別表及特別神社、本務・兼務神社、献幣使参向神社、幣饌料供進神社、献幣使・随員旅費等
3	会 議 費	4,500,000	4,500,000	0	会議旅費、諸費
4	庁 務 費	45,220,000	43,950,000	1,270,000	神事費、儀礼費、役員報酬、諸給与及び福利厚生費、需要費
5	負 担 金	25,823,224	25,906,320	△83,096	神社本庁へ
6	事 業 費	18,566,000	17,966,000	600,000	大麻関係費、教化部費、庁報発行費、神社振興対策費、職員研修費、東海五県連合会費等
7	研 修 諸 費	200,000	200,000	0	神社庁研修諸費
8	庁 舎 維 持 費	1,160,000	1,160,000	0	修繕費、設備費、火災保険費
9	交 付 金	3,400,000	3,400,000	0	神職会、総代会、災害慰藉特別会計各交付金
10	積 立 金	4,000,000	4,000,000	0	基本金積立金、役員退職積立金、五県連合総会積立金、神道帛揚資金積立金等
11	補 助 金	50,000	50,000	0	時局対策費
12	予 備 費	4,969,389	8,830,647	△3,861,258	
	合 計	164,000,000	166,660,000	△2,660,000	

平成27年度長野県神社庁災害救助慰藉特別会計歳入歳出予算書

歳入の部

(単位：円)

	科 目	本年度予算額	前年度予算額	比較増減△	附記説明
1	負 担 金	3,375,000	3,330,000	45,000	支部負担金、神職掛金
2	災害救助慰藉特別会計交付金	700,000	700,000	0	神社庁、総代会
3	本 庁 見 舞 金	1,000	1,000	0	
4	雑 収 入	1,000	1,000	0	雑収入
5	繰 越 金	5,923,000	1,202,000	4,721,000	
	合 計	10,000,000	5,234,000	4,766,000	

歳出の部

(単位：円)

	費 目	本年度予算額	前年度予算額	比較増減△	附記説明
1	災 害 慰 藉 費	3,685,000	2,986,000	699,000	神社災害慰藉費、神社総代会慰藉費、神職災害慰藉費
2	神 職 掛 金	2,175,000	2,130,000	45,000	神職掛金積立金
3	本 庁 災 害 慰 藉 費	300,000	58,000	242,000	災害対策資金
4	運 営 費	60,000	60,000	0	事務費、旅費、雑費
5	予 備 費	3,780,000	0	3,780,000	事務費、旅費、雑費
	合 計	10,000,000	5,234,000	4,766,000	



舞 見 中 暑



<p>宮司 奥谷一文 他職員 一同</p> <p>長野縣護國神社</p> <p>松本市美須々六番一号</p>	<p>宮司 小平弘起 他職員 一同</p> <p>穂高神社</p>	<p>宮司 藤井茂信 他職員 一同</p> <p>戸隠神社</p>	<p>宮司 武藤美登 他職員 一同</p> <p>生島足島神社</p>	<p>諏訪大社</p>
<p>宮司 竹内直彦 大町市大字大町二〇九七</p> <p>若一王子神社</p>	<p>宮司 堀内潔人 他職員 一同</p> <p>武水別神社</p>	<p>宮司 宮坂清</p> <p>手長神社</p> <p>諏訪市茶臼山鎮座</p>	<p>宮司 遠藤久芳 他職員 一同</p> <p>深志神社</p>	<p>松本市 四柱神社 宮司 宮坂信廣 他職員 一同 http://www.go.tvm.ne.jp/~yohashira</p>
<p>宮司 井出重雄 佐久市長 水澤口鎮座 佐久市 田口鎮座</p> <p>新海三社神社</p> <p>佐久総社</p>	<p>宮司 市原貴美雄 他職員 一同</p> <p>富士山稻荷神社</p> <p>飯田市浜井町 破魔射場鎮座</p>	<p>宮司 水澤光男 他職員 一同</p> <p>熊野皇大神社</p> <p>輕井沢町峠鎮座</p>	<p>宮司 滝重人 他職員 一同</p> <p>御嶽神社</p> <p>木曾御嶽王滝</p>	<p>木曾総社 御嶽神社 宮司 武居哲也</p>
<p>宮司 鷲尾昭一 他職員 一同</p> <p>小菅神社</p> <p>飯山市小菅の里鎮座</p>	<p>宮司 関口守和 他職員 一同</p> <p>大星神社</p> <p>上田市 眞田三代崇敬社</p>	<p>宮司 今井正昭 他職員 一同</p> <p>科野大宮社</p> <p>上田市常田鎮座 總社 大宮</p>	<p>宮司 水澤光男 他職員 一同</p> <p>長倉神社</p> <p>輕井沢町中輕井沢鎮座</p>	<p>輕井沢町旧輕井沢鎮座 諏訪神社 宮司 水澤光男 他職員 一同</p> <p>總代會長 渡辺盛夫</p>



舞 見 中 暑




<p>上伊那郡箕輪町三日町 御射山三社 宮司 唐沢光忠 祢宜 唐沢光忠 総代会長 伊藤藤要</p>	<p>大御食神社 宮司 富岡武彦 祢宜 富岡俊明 権祢宜 白鳥操子 権祢宜 富岡清彦 総代会長 赤須弘侑</p>	<p>上伊那郡辰野町小野 矢彦神社 宮司 立澤俊壽 祢宜 立澤俊壽 総代会長 中村修司</p>	<p>上伊那郡飯島町 梅戸神社 宮司 今井泰佑 祢宜 茅野理也 権祢宜 今井理也</p>	<p>上伊那郡辰野町 三輪神社 宮司代務者 矢島正稔</p>
<p>上水内郡小川村小根山鎮座 小川神社 宮司 宮下俊樹 祢宜 宮下俊樹 総代会長 増田幸成</p>	<p>松本市梓川鎮座 大宮熱田神社 宮司 山田充春</p>	<p>あづみ野 住吉神社 宮司 飯田泰之 手続代長 塚原尚之</p>	<p>国選定重要建造物群宿場街 中山道奈良井宿 鎮座 鎮座 神社 宮司 巢山清人 祢宜 永井康宏</p>	<p>木曾郡木曾町福島鎮座 水無神社 名譽宮司 宮田正士 宮司 宮田利彦</p>
<p>長野市東町鎮座 武井神社 宮司 齋藤吉睦</p>	<p>長野市城山鎮座 健御名方富命彦神別神社 宮司 齋藤吉睦</p>	<p>長野市箱清水鎮座 湯福神社 宮司 齋藤安彦 祢宜 齋藤英之</p>	<p>八幡宮 宮司 神田ゆき乃 祢宜 神田ゆき乃</p>	<p>七二会鎮座 式内社 守田神社 宮司 矢澤龍一 主任総代 北島好雄 會計 成田好雄</p>
<p>国宝 仁科神明宮 大町市社宮本</p>	<p>飯田市八幡町一九九九 鳩ヶ嶺八幡宮 (重要文化財「菅田別尊神像」) 宮司 伊原義雄 総代会長 井上久美</p>	<p>岡谷市小井川鎮座 小井川賀茂神社 宮司 有賀寛典</p>	<p>長野市松代町鎮座 象山神社 宮司 瀧澤基 祢宜 瀧澤けい子 権祢宜 瀧澤理恵</p>	<p>長野市上松鎮座 信濃招魂社 宮司 齋藤吉睦</p>



暑 中 見 舞



 <p>三 嶽 神 社 権 祢 宮 祢 宜 宜 司 宇 宇 宇 治 治 治 橋 橋 橋 邦 克 牧 彦 彦 子</p> <p>塩尻市中西條鎮座</p>	<p>箕 輪 南 宮 神 社 宮 司 唐 沢 克 忠 祢 宜 唐 沢 光 忠 総代会長 高 橋 英 行 箕輪町大字中箕輪木下</p>	<p>有 明 山 神 社 宮 司 等々力 満</p> <p>安曇野市穂高有明字宮城 彫刻で名高き裕明門</p>	<p>西 宮 神 社 宮 司 丸 山 肇 役員総代 一同</p> <p>えびすの神 長野市岩石町鎮座</p>	<p>伊那市荒井区 荒 井 神 社 宮 司 唐 沢 克 忠 祢 宜 唐 沢 光 忠 総代会長 久保村 友保</p>
<p>美 和 神 社 権 祢 宮 祢 宜 宜 司 矢 齋 藤 吉 睦 澤 龍 一</p> <p>長野市三輪鎮座</p>	<p>白 山 社 宮 司 伊 藤 光 宣</p> <p>伊那市御園区鎮座</p>	<p>瀧 澤 けい子</p> <p>全国女子神職協議会参与 長野県敬神婦人連合会会長 長野県女子神職会顧問 柴神社宮司</p>	<p>永 持 はな子</p> <p>長野県女子神職会顧問 神明宮宮司</p>	<p>塩尻市北小野鎮座 小 野 神 社 宮 司 宇 治 橋 邦 彦 淳 祢 宜 宇 治 橋 邦 彦 総代会長 横 澤 健 吾</p>
<p>鹽 竈 神 社 祢 祢 宮 宜 宜 司 藤 大 澤 明 三 昭 節 子</p> <p>奥州一之宮鹽竈神社御分社</p>	<p>熊 野 出 速 雄 神 社 (皆 神 神 社) 宮 司 武 藤 登 外職員 一同</p> <p>長野市松代町皆神山</p>	<p>殿 村 八 幡 宮 祢 祢 宮 宜 宜 司 清 唐 沢 光 忠 水 沢 良 人</p> <p>上伊那郡南箕輪村</p>	<p>長 沼 神 社 権 祢 宮 祢 宜 宜 司 長 長 沼 房 忠 沼 沼 誠 一</p> <p>長野市大町鎮座</p>	<p>駒ヶ根市赤穂鎮座 大 宮 五 十 鈴 神 社 祢 祢 宮 宜 宜 司 白 白 鳥 俊 明 鳥 白 鳥 操 子</p> <p>http://isuzu-jinja.jp/</p>
	<p>五 宮 神 社 宮 司 高 橋 邦 衛</p>	<p>稲 荷 神 社 祢 祢 宮 宜 宜 司 井 伴 出 野 健 三</p> <p>佐久市白田鎮座</p>	<p>健 御 名 方 富 命 彦 神 別 神 社 祢 祢 宮 宜 宜 司 水 高 橋 野 晴 光</p> <p>飯山市五束鎮座 (国重文若宮八幡社)</p>	<p>安曇野市豊科南穂高 洲 波 神 社 宮 司 宮 澤 民 雄</p>



遊就館 拝観のご案内

私は昔から小学校の教壇に立ちます。愛する人のため、そして自分のために、命は大切にせねばならないということを伝えていきたいと思っています。(20代女性)

14年前に亡くなった祖父は、南方へ戦いに行っていたようです。祖父が生きて帰って来られたのは奇跡です。一緒に戦った戦友の方がいてこそだと思います。「本当にありがとうございました」と伝え続けたいです。(30代男性)

去年、子供を出産し、命の大切さを学びました。自分の子供にも戦争について語っていきたいです...子供たちのために平和な世界が続くように。(30代女性)

遊就館自由記述ノートより

英霊の御遺影に写らやさい、眼差し
英霊の家族に宛てた愛情あふれる書簡
そして英霊に捧げられた花嫁人形
ひとつひとつの展示品からは英霊の切なる願いと
当時を生きた人々のあたたかい心の交流を学ぶことができます。
ぜひ、ご家族お揃いで遊就館を拝観下さい。

開館時間 9:00～16:30
拝観料 大人800円、大学生500円、中学・高校生300円
小学生以下無料
※宗敬会 賛会日無料
※終戦70年特別参拝をされた方は無料
休館日 平成27年6月24日～26日、12月26日～31日

平成27年特別展 大東亜戦争七十年展 最終章 ～今を生きる全ての人へ～

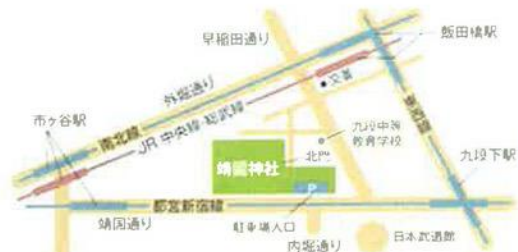
平成27年
3月21日～12月8日

昭和20年の本土防衛作戦に関する御祭神の遺品、遺書及び史資料を展示。



靖國神社社務所

〒102-8246 東京都千代田区九段北3丁目1番地1号
電話 03-3261-8326 (代)
FAX 03-3261-8320 (祭儀課)
ホームページ <http://www.yasukuni.or.jp/>



- J R ●中央・総武線各駅停車 「市ヶ谷駅」「飯田橋駅」から各徒歩10分
地下鉄 ●東西線・半蔵門線・都営新宿線 「九段下駅」から徒歩5分
●東西線・有楽町線・都営大江戸線 「飯田橋駅」から徒歩10分
●南北線・有楽町線・都営新宿線 「市ヶ谷駅」から徒歩10分